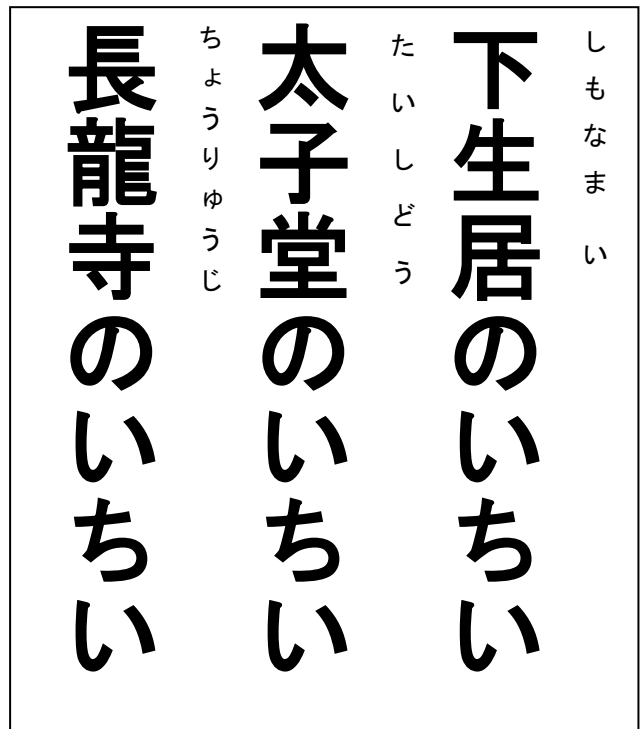


かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第43号（令和4年6月）

あゆむ「今日は、木を見に行くの？」
ミドリ「そう。文化財として指定になっている木
なんだって。」
あゆむ「木が、文化財？」
ふみお「うん。天然記念物の樹木ということだね。」
文じい「ふむ。学術的に価値の高い動植物や鉱物
などを天然記念物として保護・保存をす
るものじゃ。」
ミドリ「そういえば、植物や魚などで大変めずら
しいものなのでしっかり保護しようとい
うようなことを、テレビなどで見たりす
ることあるわね。」
あゆむ「なるほど。それで、上山にはそういうよ
うなものがあるの？」
ミドリ「今日見るのは、“いちい”の木と聞いたけ
ど、いったいどんな木かしら？」
ふみお「ポケット図鑑をもってきたから、見てみ
よう。」
ふみお「ええと、イチイ科で、和名がイチイだ。」
ミドリ「ふうん。それから赤い実がなるのね。食
べられるのかしら？」
文じい「食べられるが、種や葉など植物全体に毒
があるから注意をしなければならん。」
あゆむ「そういえば、このような木は、家の庭な
どでよく見かけるね。」
ミドリ「そうね。でも、横に広がっているような
ものもあるわね。同じイチイなのかしら。」
ふみお「図鑑の中には、キャラボクというの載
っているけれど、それかな。」
文じい「キャラボクはイチイの変種で、葉の付き
方が違っているようだ。それに、イチイは
高い木になる。」
あゆむ「へえ、早く見てみたいな。」
ふみお「まず、下生居の尾形家住宅だって。」
ミドリ「あら、尾形家は前に訪問したわね。そう
いえば、裏の方に大きな木があったわ。」
ふみお「あ、尾形さんが案内してくださる。」



ミドリ「うわあ、やっぱり大きいわね。何年ぐら
いたっているのかしら？」



あゆむ「およそ 300 年と尾形さんはおっしゃる。」
 ふみお「この住宅が建てられたころか、間もなくのころだね。」
 ミドリ「住宅と共に歩んできたわけね。」
 あゆむ「それにしても、しだいに枯れてきているという尾形さんの話が気になるな。」
 ふみお「そうだな。そして、次が永野の太子堂のいちいだね。」
 あゆむ「階段を上って、あ、これかな。だいぶ枯れてしまっているな。」



ミドリ「そうね。でも、必死に幹や枝を伸ばし葉をつけている感じだわ。」
 文じい「これも、推定樹齢300年と言われている。」
 ふみお「登り口で、長い間太子堂を守りながら生き続けてきたんだね。」
 ミドリ「そうね。ところで、図鑑に、いちいは、“一位”というふうにも書いてあったけど、どういう意味なのかしら？」
 文じい「ふむ、実は、えらい方や神主さんなどが手に持つ“笏”というものが、イチイの木から作られた。それで、仁徳天皇が、この木に“正一位”という最高位の位を授けたので、一位とついたらとされておる。」



ミドリ「そうなのね。おもしろいわね。」

ふみお「次は、小倉の長龍寺のいちいだね。」
 文じい「先代の奥様がご案内をしてくださる。」
 ミドリ「うーん、このイチイはすばらしいわね。姿よくしっかり立っているわ」



あゆむ「でも、奥様が陰の方を案内している。」
 ふみお「アッ、裏側が空洞になっている。」
 文じい「推定樹齢 350 年じゃからのう。」
 ふみお「やっぱり寺と共に歩んできたんだね。」
 ミドリ「空洞でも、幹の外廻りのところで命をつないでいるんだわ。がんばっているのね、この木も。」
 あゆむ「それにしても、どうしてイチイという木が指定の文化財となったのかな。」
 ふみお「実は、イチイは、別名アララギとも言っておる。アララギと言えば、歌人の正岡子規と同じ思いをする人たちのグループの機関誌の名前だった。やがて、上山の生んだ大歌人 斎藤茂吉が編集発行人にもなった。」
 ふみお「あ、それでアララギが市の木になって、アララギ、つまりイチイの木が指定されるようになったということか。」
 ミドリ「なるほどね。私、帰ったら、がんばっているイチイの木を見ての短歌をつくってみるわ！」